

ダウン症児を持つ父親の障害観の変化とその要因 —手記を基にしたプロセスの分析—

キーワード：ダウン症候群、父親、障害観、父親への援助、障害観の変化

○渡部未来¹⁾、真壁あさみ²⁾

新潟大学医歯学総合病院¹⁾ 新潟青陵大学²⁾

I 目的

近年、父親の育児が話題となっており、父親も積極的に育児に参加する風潮が漂っている。それに伴い、看護者には母親のみならず父親に対する援助についても考え、実現することが求められる。特に、ダウン症候群の子どもを持つ親への援助については、出生後早期の段階で告知がされることなどから、親への負担は大きく、夫婦での支え合いが必須であり、看護者はそれを支えていく必要がある。本研究では、ダウン症候群の子どもを持つ父親の子どもの障害に対する見方、考え方の変化に注目し、それに影響していた要因を明らかにし、父親への援助の在り方について考えることを目的とした。

II 方法

1. 研究対象：ダウン症候群の子どもを持つ父親 2 名の手記。

・徳田茂. 知行とともに ダウン症児の父親の記. 東京：川島書店；1994.

・小林完吾. 愛、見つけた 小さな命の置きみやげ. 東京：二見書房；1983.

2. 分析方法：手記の中から、子どもが小学校に入学する以前の時期における、①障害に対する見方・考え方、②障害受容に関係する要因、③子どもに対する見方・考え方が表現されている文章を集めた。コードの類似性と差異に注目して内容を分析し、サブカテゴリー化し、それぞれに名前を付けた。そして、さらに意味・内容が類似するサブカテゴリーを集めカテゴリー化し、名前を付けた。

III 結果

父親 A、B による手記から得られたデータを分析した結果、25 のカテゴリーと 31 のサブカテゴリー、140 のコードが抽出された。以下、【】はカテゴリーを、<>はサブカテゴリーを示す。

父親は【子どもの将来を前向きに願う】ようになるまでに、子どもと向き合うこと、【子どもに対する父親役割の獲得】、【かけがえのない存在として受け入れる】という課題に遭遇することが明らかとなった。告知直後は、<夢中で妻を支える>ことに徹したり、<妻に明るく接する>ように心がけることや、【家族の負担を軽減するための行動を促す自分なりの考え】に基づき、【妻の負担を軽減する】為に必死に行動することが父親を支えていた。我が子を【かけがえのない存在として受け入れる】背景に、<親子で過ごす水

入らずの時間>の積み重ねと【我が子らしさの発見】が存在した。【家族間での支え合い】や【家族以外の人々に背中を押される】出来事もまた影響していた。

【かけがえのない存在として受けとめる】こと、【子どもと歩んでいく自信が湧く】こと、【障害児の親子との出会い】は、【子どもに対する父親役割の獲得】に影響し、【子どもの将来を前向きに願う】きっかけとなっていた。一方、【将来への不安】と【告知直後の自分の思いや行動への罪悪感】を抱えながら子どもと歩んでいくことが明らかとなった。

IV 考察

告知直後の時期に母親を最も支える存在は父親(夫)であり、父親を最も支える存在は母親(妻)である。このことから、父親の心理状況は母親にも影響を及ぼす可能性があり、援助者はダウン症候群の子を持つ両親という一括りで関わるのではなく、父親、母親それぞれが告知を受けどのように感じたのかを汲み取り、理解する必要がある。予測不能な【将来への不安】や【告知直後の自分の思いや行動への罪悪感】の解消は困難であり、援助者としては両親が【我が子らしさの発見】をし、将来を思い描き、希望を持ち続けていけるように関わっていくことが望まれる。

V 結論

1. 父親が告知を受け、子どもの将来を前向きに願うようになるまでの間に、子どもと向き合うこと、かけがえのない存在として受けとめること、父親役割の獲得という課題が存在した。

2. 母親は、親の会や療育教室に参加し、同じ境遇にある人々との関わりの中で悩みを解決し子どもを受けとめていく一方、父親は告知直後に妻や子どもへの使命感を感じ、それに基づき行動するなかで子どもの存在を受けとめていく。

3. 子どもをかけがえのない存在として受けとめることが出来たからこそ、告知直後の子どもに対するネガティブな見方や考え方に対し罪悪感を持っており、子どもの将来を前向きに願うようになった後も心理面への援助は必要とされる。

参考文献

- 1)大日向輝美・木原キヨ子. 幼児期のダウン症児をもつ母親の体験. 小児保健研究. 1996;55(6):713-720.
- 2)阿南あゆみ・山口雅子. 我が子の障害受容過程に影響をおよぼす要因の検討—文献的考察—. 産業医科大学雑誌. 2007;29(2):183-195.